

雅楽

雅楽は、古代の音楽と舞踊を広く指すもので、8世紀から演奏されており、日本の最も古い伝統音楽である。雅楽はもともと中国と朝鮮半島から伝わったもので、主に朝廷行事のときや、寺院や神社で上演された。何世紀にもわたる文化交流とこの音楽の漸進的な進化の中で使用されてきた楽器とスタイルは、日本の美学に最も強く共鳴するものであった。今日の雅楽の演奏者と踊り子は、平安時代（794～1185）の朝廷音楽家の伝統を引き継いでおり、歴史を通じて、このジャンルの名声は朝廷の権力と影響力とほぼ一致していた。

伝統的な雅楽の合奏には、3つの管楽器、2つの弦楽器、3つの打楽器が含まれている。雅楽の構成では、いくつかの楽器が同時にメロディーを演奏する。芸術では古代の伝統への執着が強く、現代的な構成は稀である。

彦根の雅楽楽器コレクション

その多くが藩主井伊直亮（1794～1850）によって収集された博物館の雅楽楽器コレクションは、日本で最も豊富なコレクションの1つであると言っても過言ではない。特に精巧に作られた雅楽楽器には、個々の名前が付けられることも珍しくなく、それらを保管するために使用される繊細な袋や箱ですら、しばしば芸術作品そのものとなる。

管楽器

雅楽の主要な3種類の管楽器には箏、笙、龍笛がある。箏は二重のリードを備えた9穴の小さなパイプで、雅楽の主要な旋律楽器の1つである。

笙は中国から来た楽器で、17本の細い竹のパイプで構成され、それぞれが独自のリードを持ち、外観と音の両方が鳳凰に似ていると言われている日本のフリーリード楽器である。ハーモニカに似て、笙は息を吸うことによっても、息を吐くことによっても音を出せる。

竹製の7穴の龍笛は、特に中国風の曲を演奏するのに使用される。龍笛の音は龍の声に似ていると言われている。

弦楽器

雅楽の合奏の主な弦楽器は、西アジアから伝わった短首の4本弦のフルット・リュート

である琵琶である。琵琶は13弦の長いチターである箏（あるいは琴）により支えられている。演奏する際にはどちらの楽器も指ではなく、琴軋（ことさぎ）と呼ばれるヘラ状のピックを使って奏でられる。一般的に、琵琶は曲中の抽象的なメロディーラインを演奏する。箏は短いメロディーフレーズをそこに付け加える。

打楽器

3つの打楽器はメロディーの各フレーズを強調し、リズムを固定させる。雅楽の合奏の大きな吊りドラム（太鼓）は、主要なアクセントを与える。小さな真鍮製の鞆鼓と小さな銅製の鉦である鉦鼓は、旋律に複雑さを加える。また、鞆鼓はテンポの変化を知らせ、曲の終わりを告げる。